〔島根女子短期大学紀要 Vol. 24, p. 115～123 (1986)〕

和服寸法に関する研究（第2報）

野　津　哲　子
（被服構成学第II研究室）

Studies on the Measurements of Japanese Traditional Clothing (Part 2)

Tetsuko NOTSU

1. 緒　言

平面構成されている和服寸法は，四肢，軀幹部の別なく，人体をおおい包み，大部分が平面的で直線的な縫製によって製作され，着装によって体になじませ，合わせることができるため，体格や体型などに関して検討がなされていない。大部分は標準寸法によって製作されている。

江戸時代にきめられたと推測できる和服仕立上がり標準寸法は，明治，大正，昭和と受け継がれ，現在においても根本的な変化は極めて少ない。

近年，青少年の体位は年々向上し，その発育ぶりは顕著である。特に身長の伸びは著しく，その記録は年毎に更新されつつある。

和服を美しく着こなすためには，寸法が体格にあって，均衡がとれていることが大切な要素である。またその適不適は，着用者の外観，機能，着心地の上に影響を及ぼすのである。生活動作・生活様式など種々の条件の変化により従来から使用されてきた標準寸法のみでは，不都合な箇所も見出されるようになってきたこと，更に着装技術の低下や，和服にも洋服的な考え方が強くなってきていることなど現代生活に適合し，着心地よく，美しく見える和服を製作することは，むつかしくなってきたと思われる。

そこで今回は一般成人女子167例を対象として下記に示す16項目について実際の製作寸法の実態を把握し，全国の女子の体格調査結果の数値を用いて比較検討するのも一方法であろうと考え，各項目ごとに問題点を究明して今後の被服教育の基礎的資料とするため本調査を実施し考察した。

2. 調査方法

調査対象，時期および方法

本調査は1983年7月～8月にわたって予め作成した調査用紙200枚を本学被服専攻の学生を通じて配布し，学生家庭の主婦およびその近隣家庭の主婦について調査する質問法の形式をとった。

調査項目は次に示す16項目で自由書込み法によった。

製作寸法調査

ゆかたについて（単位，cm）

各部名称

①袖丈（長い袖），②袖丈（短い袖），③袖口（長い袖），④袖口（短い袖），⑤袖附（長い袖），⑥袖附（短い袖），⑦袖幅，⑧袂の丸み（長い袖），⑨袂の丸み（短い袖）　⑩身丈（裁ち切り）　⑪ゆき，⑫身八つ口，⑬後幅，⑭前幅，⑮衿下，⑯合褄幅

その結果，被調査総数は167人で有効回答率は83.5

第1表　年代別調査実数とその比率

年　代	調査実数	比率
20　代	19	11.4
30　代	28	16.8
40　代	35	21.0
50　代	38	22.8
60　代	47	28.0
計	167	100.0

第2表　体格別調査実数

体格	級　間	合　計（人）	百分率（%）
身長（cm）	145 以下	8	4.8
	146 ～ 150	48	28.7
	151 ～ 155	65	38.9
	156 ～ 160	39	23.4
	161 ～ 165	5	3.0
	166 以上	2	1.2
合　計		167	100
体重（kg）	45 以下	1	0.6
	46 ～ 49	8	4.8
	50 ～ 53	61	35.3
	54 ～ 57	52	31.1
	58 ～ 61	35	21.0
	62 ～ 65	11	6.6
	66 以上	1	0.6
合　計		167	100
胸囲（cm）	75 以下	1	0.6
	76 ～ 79	9	5.4
	80 ～ 83	54	32.3
	84 ～ 87	94	56.3
	88 ～ 91	7	4.2
	92 ～ 95	2	1.2
合　計		167	100

%であった。

被調査者の年代別・体格別構成を第1表，第2表に示す。

体格調査については，被調査の体位を概観するために，身長，体重，胸囲について文部省学校保健統計調査報告書[1]ならびに日本統計年鑑[2]の全国資料にもとずいた。

本学被服専攻の学生については毎年4月～5月に学内で実施された身体検査時の成績にもとずいた。

3. 結果および考察

1. 製作寸法（実寸法）

和服製作寸法調査結果を項目別に数値集計し考察検討した。

①～⑯の項目別結果は第3表に一括表示した。

和服寸法の平均値の信頼区間（有意水準95%）の

第3表　調査項目別度数分布表

調査項目	寸法（cm）	度　数	百分率
① 袖丈（長い袖）	55	88	52.6
	58	4	2.4
	60	58	34.8
	63	9	5.4
	64	8	4.8
	M = 57.6	S.D.= 3.01	
② 袖丈（短い袖）	38	29	17.4
	40	113	67.6
	41	5	3.0
	43	8	4.8
	44	5	3.0
	45	4	2.4
	50	3	1.8
	M = 40.2	S.D.= 1.99	
③ 袖口（長い袖）	21	11	6.6
	22	2	1.2
	23	154	92.2
	M = 22.9	S.D.= 0.50	
④ 袖口（短い袖）	20	71	42.4
	21	50	30.0
	23	46	27.6
	M = 21.1	S.D.= 1.22	
⑤ 袖附（長い袖）	21	7	4.2
	23	160	95.8
	M = 22.9	S.D.= 0.40	
⑥ 袖附（短い袖）	21	32	19.1
	22	2	1.2
	23	133	79.7
	M = 22.6	S.D.= 0.79	
⑦ 袖幅	31	101	60.4
	32	66	39.6
	M = 31.4	S.D.= 0.49	
⑧ 袂の丸み（長い袖）	2	67	40.1
	4	100	59.9
	M = 3.2	S.D.= 0.98	
⑨ 袂の丸み（短い袖）	8	85	50.8
	9	3	1.8
	10	79	47.4
	M = 9.0	S.D.= 0.99	
⑩ 身丈（裁ち切り）	150	44	26.4
	152	110	65.8
	155	6	3.6
	160	7	4.2
	M = 151.9	S.D.= 2.01	
⑪ ゆき	62	18	10.8
	63	91	54.5
	64	58	34.7
	M = 63.2	S.D.= 0.62	
⑫ 身入っ口	13	144	86.2
	14	17	10.2
	15	6	3.6
	M = 13.2	S.D.= 0.47	
⑬ 後幅	28	75	44.9
	29	81	48.5
	30	11	6.6
	M = 28.6	S.D.= 0.62	
⑭ 前幅	23	77	46.0
	24	69	41.0
	25	21	13.0
	M = 23.7	S.D.= 0.69	
⑮ 衿下	75	26	15.6
	76	114	68.2
	78	27	16.2
	M = 76.2	S.D.= 0.65	
⑯ 合褄幅	13.5	129	77.3
	14.0	38	22.7
	M = 13.6	S.D = 0.21	

第４表　和服寸法の平均値の信頼区間

(cm)

項目 ＼ 信頼区間	和服寸法の平均値の信頼区間（有意水準95.0％）
① 袖丈（長い袖）	57.1 ～ 58.1
② 袖丈（短い袖）	39.9 ～ 40.5
③ 袖口（長い袖）	22.8 ～ 23.0
④ 袖口（短い袖）	20.9 ～ 21.3
⑤ 袖附（長い袖）	22.8 ～ 23.0
⑥ 袖附（短い袖）	22.5 ～ 22.7
⑦ 袖　幅	31.3 ～ 31.5
⑧ 袂の丸み（長い袖）	3.1 ～ 3.4
⑨ 袂の丸み（短い袖）	8.8 ～ 9.1
⑩ 身丈（裁ち切り）	151.6 ～ 152.2
⑪ ゆ　き	63.1 ～ 63.3
⑫ 身入っ口	13.1 ～ 13.3
⑬ 後　幅	28.5 ～ 28.7
⑭ 前　幅	23.6 ～ 23.8
⑮ 衿　下	76.1 ～ 76.3
⑯ 合褄幅	13.5 ～ 13.6

第５表　項目別平均寸法および分散

M｛平均値(cm)｝
S.D.（標準偏差）
C.V.｛変動係数(%)｝
S.E.（標準誤差）

項目	M	S.D.	C.V.	S.E.
① 袖丈（長い袖）	57.6	3.01	5.23	0.23
② 袖丈（短い袖）	40.2	1.99	4.95	0.15
③ 袖口（長い袖）	22.9	0.50	2.18	0.04
④ 袖口（短い袖）	21.1	1.22	5.78	0.09
⑤ 袖附（長い袖）	22.9	0.40	1.75	0.03
⑥ 袖附（短い袖）	22.6	0.79	3.50	0.06
⑦ 袖　幅	31.4	0.49	1.56	0.04
⑧ 袂の丸み（長い袖）	3.2	0.98	30.60	0.08
⑨ 袂の丸み（短い袖）	9.0	0.99	11.00	0.08
⑩ 身丈（裁ち切り）	151.9	2.01	1.32	0.16
⑪ ゆ　き	63.2	0.62	0.98	0.05
⑫ 身入っ口	13.2	0.47	3.56	0.04
⑬ 後　幅	28.6	0.62	2.17	0.05
⑭ 前　幅	23.7	0.69	2.91	0.05
⑮ 衿　下	76.2	0.65	0.85	0.05
⑯ 合褄幅	13.6	0.21	1.54	0.02

結果は第４表に，項目別平均寸法および分散の結果は第５表に，最小値，最大値ならびに最大値と最小値の差の結果は第６表に示した。

①袖丈（長い袖）についてみると，調査平均値は57.6cm，標準偏差は3.01である。第４表の結果から長い袖丈の場合の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると57.1cmと58.1cmの間にある。長い袖丈の最頻値は55.0cmである。製作寸法は55.0cm～64.0cmである。55.0cmを用いて製作している者が全体の52.6％と最も多く，第２位は60.0cmで34.8％を占めている。したがって55.0cm～60.0cm間の寸法を用いて製作している者が89.8％もいたことがわかった。第６表に示した最小値，最大値ならびに最大と最小の差についてみると，長い袖丈が最も個人差が大きく最小値は55.0cm，最大値は64.0cmでその差は9.0cmである。

第６表　最小値・最大値ならびに最大値と最小値の差

(cm)

項目	最小値	最大値	最大値と最小値の差
① 袖丈（長い袖）	55	64	9
② 袖丈（短い袖）	38	50	12
③ 袖口（長い袖）	21	23	2
④ 袖口（短い袖）	20	23	3
⑤ 袖附（長い袖）	21	23	2
⑥ 袖附（短い袖）	21	23	2
⑦ 袖　幅	31	32	1
⑧ 袂の丸み（長い袖）	2	4	2
⑨ 袂の丸み（短い袖）	8	10	2
⑩ 身丈（裁ち切り）	150	160	10
⑪ ゆ　き	62	64	2
⑫ 身入っ口	13	15	2
⑬ 後　幅	28	30	2
⑭ 前　幅	23	25	2
⑮ 衿　下	75	78	3
⑯ 合褄幅	13.5	14	0.5

②袖丈（短い袖）についてみると調査平均値は40.2cm，標準偏差は1.99である。この短い袖丈の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると39.9cmと40.5cmの間にある。短い袖丈の最頻値は40.0cmである。製作寸法は38.0cm～50.0cmである。40.0cmを用いて製作している者が全体の67.6％を占めている。第２位が38.0cmで17.4％である。したがって38.0cm～40.0cm間の寸法を用いて製作している者が85.0％いたことがわかった。最小値は38.0cm，最大値は50.0cmでその差は12.0cmである。

袖丈は和服姿のシルエットを作る大切なポイントである。この袖丈の長短によって和服姿が軽快になったり，優美になったりする。したがって袖丈は着る人の年齢と目的に合わせたものを着る人の身長によって割り出したものでなければならない。

調査による製作寸法では衣服の機能，着装に関係なく，視覚的に寸法が決められたものが多かったように思われる。また身長と関係なく標準寸法に近い寸法が用いられている傾向もうかがわれた。

③袖口（長い袖）についてみると調査平均値は

22.9cm，標準偏差は0.50である。この長い袖口の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると22.8cmと23.0cmの間にある。最頻値は23.0cmである。製作寸法は21.0cm～23.0cmである。23.0cmを用いて製作している者が全体の92.2％を占めている。最小値は21.0cm，最大値は23.0cmでその差は2.0cmである。個人差はほとんど認められなかった。

④袖口（短い袖）についてみると調査平均値は21.1cm，標準偏差は1.22である。この短い袖口の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると20.9cmと21.3cmの間にある。最頻値は20.0cmである。製作寸法は20.0cm～23.0cmである。20.0cmを用いて製作している者が全体の42.4％で最も多く，次いで21.0cmが30.0％であった。72.4％の者が20.0～21.0cm間の寸法を用いている。最小値は20.0cm，最大値は23.0cmでその差は3.0cmである。全体的にみると標準寸法が用いられている傾向がみられた。

⑤袖附（長い袖）についてみると調査平均値は22.9cm，標準偏差は0.40である。袖附の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると22.8cmと23.0cmの間にある。最頻値は23.0cmである。製作寸法は21.0cm～23.0cmである。23.0cmを用いて製作している者が全体の95.8％を占めている。最小値は21.0cm，最大値は23.0cmでその差は2.0cmである。全体的には差がなく，標準寸法に近い値を採用している。

⑥袖附（短い袖）についてみると調査平均値は22.6cm，標準偏差は0.79である。袖附の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると22.5cmと22.7cmの間にある。最頻値は23.0cmである。製作寸法は21.0cm～23.0cmである。23.0cmを用いて製作している者が全体の79.7％で最も多い。最小値は21.0cm，最大値は23.0cmでその差は2.0cmである。袖丈の長短に関係なく標準寸法が採用されていることが顕著である。

⑦袖幅についてみると調査平均値は31.4cm，標準偏差は0.49である。この袖幅の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると31.3cmと31.5cmの間にある。最頻値は31.0cmである。製作寸法は31.0cm～32.0cmである。31.0cmを用いて製作している者が全体の60.4％である。最小値は31.0cm，最大値は32.0cmでその差は1.0cmである。

⑧袂の丸み（長い袖）についてみると調査平均値は3.2cm，標準偏差は0.98である。この長い袖の袂丸みの平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると3.1cmと3.4cmの間にある。最頻値は4.0cmである。製作寸法は2.0cm～4.0cmである。4.0cmを用いて製作している者が全体の59.9％である。最小値は2.0cm，最大値は4.0cmでその差は2.0cmである。

⑨袂の丸み（短い袖）についてみると調査平均値は9.0cm，標準偏差は0.99である。この短い袖の袂丸みの平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると8.8cmと9.1cmの間にある。最頻値は8.0cmである。製作寸法は8.0cm～10.0cmである。8.0cmを用いて製作している者が全体の50.8％で最も多く，次いで10.0cmが47.4％を占めている。最小値は8.0cm，最大値は10.0cmでその差は2.0cmである。

⑩身丈（裁ち切り）についてみると調査平均値は151.9cm，標準偏差は2.01である。裁ち切り身丈の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると151.6cmと152.2cmの間にある。最頻値は152.0cmである。製作寸法は150.0cm～160.0cmである。152.0cmを用いている者が全体の65.8％と最も多く，次いで150.0cmが26.4％であった。したがって150.0cm～152.0cm間の寸法を用いて裁ち切り身丈を決めている者が92.2％もいたことがわかった。最小値は150.0cm，最大値は160.0cmでその差は10.0cmである。

身丈は身長と同寸が望ましいといわれているが今回の調査では標準寸法に近い寸法が採用されている。これは和服着用の機会が少なく，和服構成，着装に関する知識と経験が浅いためではないかと考えられる。自分の身長と同寸法にするという考えは肩から頭頂までの約27.0cm内外がちようど，腰のおはしより分になって着用しやすいこと，また帯を締めたときに帯の下に6.0cm内外のおはしよりができ，おはしよりの線が着丈の3/10と7/10の割り合いになって着装が効果的になることから考えられたことである。身丈が身長より長いと，おはしよりが長くなって背が低く見えるし着用が困難である。また腰まわりも太く見える。反対に身丈が身長より短いと，おはしよりが短くなって着くずれしやすい。またお腹が出て格好が悪くなる。

⑪ゆきについてみると調査平均値は63.2cm，標準偏差は2.01である。ゆきの平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると63.1cmと63.3cmの間にある。最頻値は63.0である。製作寸法は62.0cm～64.0cmである。63.0cmを用いている者が全体の54.5％を占め，次いで64.0cmが34.7％であった。最小値は62.0cm，最大値は64.0cmでその差は2.0cmである。

ゆき丈は各人によって差異があり，大体身長に比例すると考えられているが，調査結果では身長に関係なく標準寸法に近い値を採用している傾向がうかがわれた。

身体に合ったゆきは着つけをして手を下げたときには，袖口止まりと手首がすれすれになって落ちついてみえる。ゆき丈が長いと長い分量だけ手が袖口の中に入ってだらしなく見える。反対に短いと短い分量だけ手首が出て，粗野な姿に見える。身体に合ったゆき丈にするためには，手を水平に伸ばして首のつけ根のぐりぐりから手首のぐりぐりの外側きわまでを巻き尺で計った寸法を用いるとよい。

⑫身八つ口についてみると調査平均値は13.2cm，標準偏差は0.47である。身八つ口の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると13.1cmと13.3cmの間にある。最頻値は13.0cmである。製作寸法は13.0cm～15.0cmである。13.0cmを用いている者が全体の86.2％を占めている。最小値は13.0cm，最大値は15.0cmでその差は2.0cmである。全体的にみると標準寸法に近い値を採用している傾向が大きいと思われる。

⑬後幅についてみると調査平均値は23.7cm，標準偏差は0.62である。後幅の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると28.5cmと28.7cmの間にある。最頻値は29.0cmである。製作寸法は28.0cm～30.0cmである。29.0cmを用いている者が全体の48.5％を占め，次いで28.0cmが44.9％であった。最小値は28.0cm，最大値は30.0cmでその差は2.0cmである。

全体的に大きな差は認められなかったが標準寸法に近い値を採用していることがうかがわれた。

後幅は肩幅から2.0cm引いた寸法に決めるとよい。この2.0cmは肩山から身八つ口にかけて，袖附の縫目が斜めになった方が着つけの上で美しく見えるからである。やせ型でゆき丈の長い人は，肩幅と後幅の差が多くなるので，身八つ口より20.0cm下まで斜めにするとよい。

簡単な方法としては腰まわり寸法の1/4を前幅とし，前幅に6.0cm加えた寸法を後幅として用いる方法もある。

⑭前幅についてみると調査平均値は23.7cm，標準偏差は0.69である。前幅の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると23.6cmと25.0cmの間にある。最頻値は23.0cmである。製作寸法は23.0cm～25.0cmである。23.0cmを用いている者が全体の46.0％を占め，次いで24.0cmが41.0％であった。最小値は23.0cm，最大値は25.0cmでその差は2.0cmである。

身幅に関係なく標準寸法が用いられている傾向が強い。

⑮衿下についてみると調査平均値は76.2cm，標準偏差は0.65である。衿下の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると76.1cmと76.3cmの間にある。最頻値は76.0cmである。製作寸法は75.0cm～78.0cmである。76.0cmを用いている者が全体の68.2％で最も多かった。最小値は75.0cm，最大値は78.0cmでその差は3.0cmである。

身長に比例した寸法に製作しなければ正しい着装はできないといわれているが今回の調査結果では身長を考慮しない標準寸法が採用されている傾向が大きかった。

腰紐を締めたとき，衿先が4.0cm位かかる程度の寸法が着くずれがなく，衿先が見えないので，おはしよりの形がよい。

衿下が長すぎると，腰紐が衿先からはずれて着くずれしやすく，おはしよりの形が悪くなる。また衿下が短かすぎると衿先がおはしよりの下から見えて形が悪くなる。したがって腰紐をどこに締めるかによって衿下の寸法も異なってくる。

ウエストからくるぶしまでの丈から10.0cm引いた寸法にすると，おはしよりから衿下がかくれ，腰紐を締める位置より約4.0cm下の適当な位置になる。また身長の1/2の寸法にしてもほぼ同じである。

従来腰紐は，腰骨の上に締めていたのであるが圧迫感が強いことや洋服の影響から胴まわりの位置に締めるようである。したがって身丈も衿下も従来より長めである。

⑯合褄幅についてみると調査平均値は13.6cm，標準偏差は0.21である。合褄幅の平均値の信頼区間を信頼度95％で推定すると13.5cmと13.6cmの間にある。最頻値は13.5cmである。製作寸法は13.5cm～14.0cmである。13.5cmを用いている者が77.3％と最も多かった。最小値は13.5cm，最大値は14.0cmでその差は0.5cmである。

身幅に関係なく標準寸法に近い値が採用されている傾向がうかがわれた。

以上のことから平面構成されている和服は，着装によって体になじませ，合わせるのであるから，立体構成の被服に比べて，それほど細部にわたる採寸は必要ではない。

昔から普通の体格や着方をもとにして，各部の形

が調和するようにして決められた標準寸法がある。いわゆる女並といわれる寸法である。しかし近年身体発育が著しくなり，また生活動作，生活様式など種々の条件の変化により従来から使用されてきた標準寸法のみでは，現代生活に適合し，着心地よく美しくみえる和服を製作することはむつかしくなったと考えられる。

和服を着装する場合どの部分が生活動作に関係し美醜に関係するかを考えると次のようなことが理解できる。

身丈が長すぎるとおはしよりが長くなり，身長が低く見える。身丈が短かすぎるとおはしよりが短かくなり，腹部が出て見苦しい。

袖丈は身長に対して適した長さの袖丈は立姿をすっきり見せる。

ゆきが長すぎると，だらしなく見え，短かすぎると品がなくなる。

衿下寸法が長すぎると着くずれし易く，短かいとだらしなく見える。

全体の身幅が狭いと着くずれし易い。身幅の各縫目線が立姿の美醜に関係するので，後幅，前幅，衽幅の割合いが大切である。以上の5項目が身体に合うように寸法を決めなければならない。

被服作りで大切なゆとりの問題について平面構成の和服の立場で考えると，和服は洋服のようにきっちりした身体計測値に基づいて製作をするのではなく，直線裁によって慣習的に製作されたものを帯や紐などでしばってからだに固定するから，ゆとり量は必然的に多く離体部も多い。したがってからだの動きにつれてゆるみは適宜に動き，動作を助けるゆるやかな形態になっているが，着やすく着くずれしない和服を製作するには身体計測値にゆとり量を必要とする。

人体と長着との関連についてみると，立体構成の洋服は着用者の体格や体型を把握し，からだに合うように計画的に作られているが，和服は人体が立体であるにもかかわらず平面構成によるもので，紐類を用いて被服を人体に固着させる方法をとっているので，被服としての完成は全く着装の技術に頼っている。したがって立体構成に比べ体格や体型との関係は大ざっぱに考えられ精密な身体計測をしなくてもそれほど不都合はないのである。

長着の人体着装についてみると，人体がきものの両袖に左右の手を通す時，衣桁の役目をなし，着衣が成立する。さらに腰回りにまといつけ前面の余分を打ち合わせるが，この時右前面を下にし左前面を上に重ねてやや爪先上がりに筒型に巻き合わせ，腸稜点の位置に一度紐をしめて落ちつける。次いで衿元をととのえ打ち合わせ，胴部分の余分は胴部，腰部の曲面に合わせてしわ付けしながらなじませ，帯をしめて着衣を固定させる。着装の仕方，きものと帯の調和のいかんによって被服の表現性の巧拙が問われ，優雅，粗野，低俗などにも表現される。

一部式衣型態である和服を着装の際に，おはしよりの部分で上体衣と下体衣に分け，胴の部分で人体の複曲面に合わせてしわ付けをしながら，女性の腰部，腹部の美しさの表現を構成するのである。

前述したように江戸時代に生まれたであろう和服の仕立上げ標準寸法は，あまり変化することもなく明治・大正・昭和と日本人の生活の中で引きつがれ，たいした矛盾や抵抗もなく慣習となって生き，現代まで使用されてきていることがわかった。

多くの経験を通して樹立された標準寸法には妥当性も見い出されるが，最近日本人の体格が非常に向上している上に，和服を美しく着こなすため，また着やすくする点からも寸法が体格に合って均衡がとれているということが大切な要素であることが着目され，各種の割り出し法や採寸の仕方が研究されてきている。

第5表より項目別平均和服寸法および分散の結果を項目別に考察すると次のようである。

項目別に分布の広がりを比較してみると袖丈（長い袖）が極めて大きく3.01次いで身丈（裁ち切り）2.01袖丈（短い袖）1.99，袖口（短い袖）1.22の順である。分布の広がりの最も小さいのが合褄幅の0.21である。次いで袖附（長い袖）0.40，身八つ口0.47，袖幅0.49，袖口（長い袖）0.50の順である。

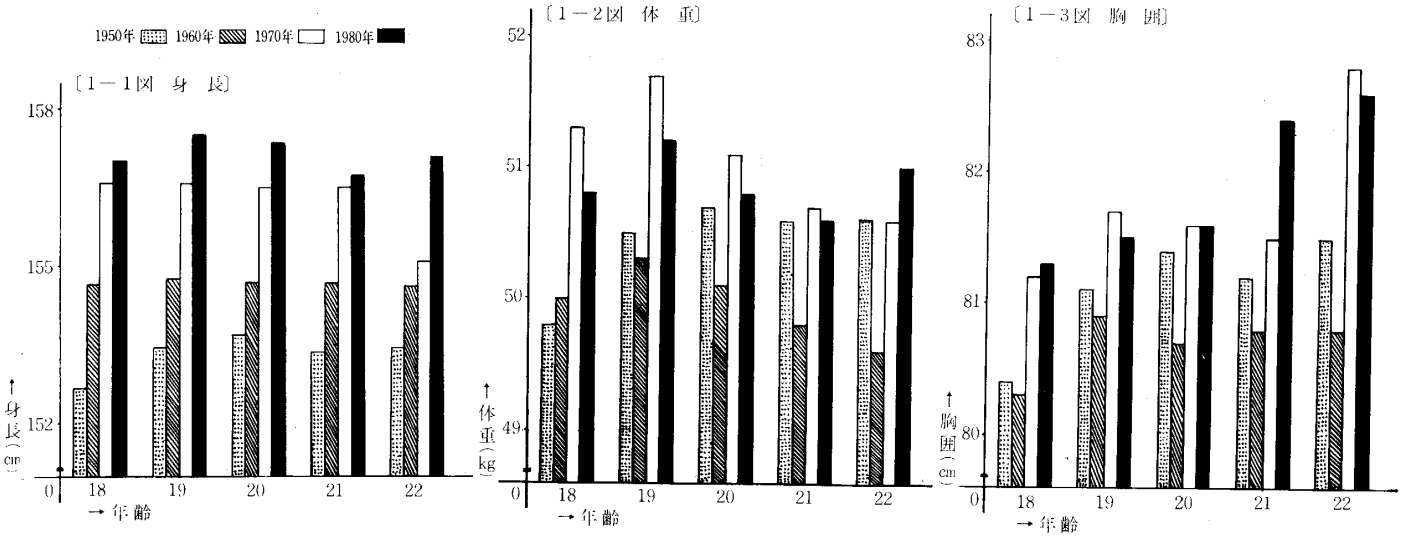
以上の結果から袖丈（長い袖），身丈（裁ち切り）袖丈（短い袖）の長径項目に分布の広がりが顕著にあらわれている。

各項目の製作寸法の長さが，それぞれ異なっているので変動係数で考察すると次のようである。

変動係数(%)は袂の丸み（長い袖）が最も大きく30.60，次いで袂の丸み（短い袖）11.00，袖口（短い袖）5.78，袖丈（長い袖）4.95，身八つ口3.56，袖附（短い袖）3.50，前幅2.91の順である。

変動係数(%)の最も小さい項目は衿下の0.85である。次いでゆき0.98，身丈（裁ち切り）1.32，合褄幅1.54，

第１図　年齢別の体位（全国）



袖幅 1.56，袖附（長い袖）1.75，後幅2.17 の順である。

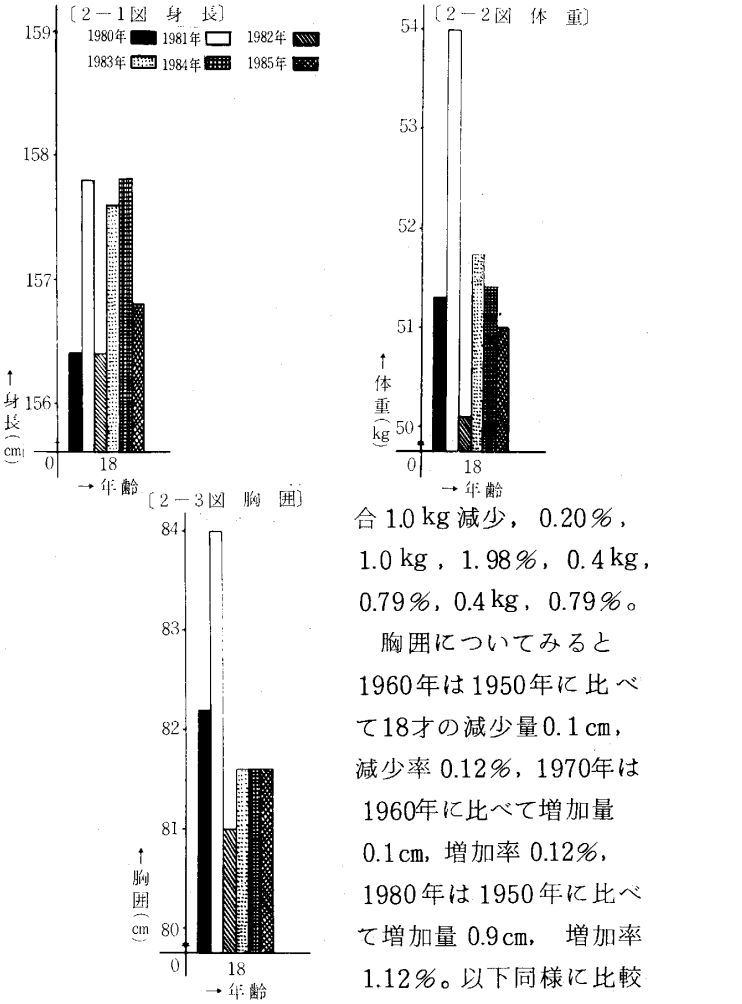
2. 体格調査結果

全国の18才から22才までの女子の体位｛身長（1－1図），体重（1－2図），胸囲（1－3図）｝の結果は第１図に示すとおりである。

身長についてみると 1960年は 1950 年に比べて18才の増加量 2.0 cm，増加率1.31％，1970年は 1960年に比べて増加量 1.9 cm，増加率 1.23％，1980年は 1970 年に比べて増加量 0.4 cm，増加率 0.26％，1980年は 1950年に比べて増加量 5.7 cm，増加率3.73％であった。以下同様に比較してみると，19才の場合 1.4 cm，0.91％，1.8 cm，1.16％，0.9 cm，0.58％，4.1 cm，2.67％．20才の場合 1.0 cm，0.65％，1.8 cm，1.16％，0.8 cm，0.51％，3.6 cm，2.34％。21才の場合 1.4 cm，0.91％，1.8 cm，1.16％，0.2 cm，0.13％，3.4 cm，2.22％。22才の場合 1.2 cm，0.78％，0.5 cm，0.32％，2.0 cm，1.29％，3.7 cm，2.41％。加令にしたがい増加の傾向が顕著にあらわれている。

体重についてみると1960年は 1950 年に比べて18才の増加量 0.2 kg，増加率 0.40％，1970年は 1960年に比べて増加量 1.3 kg，増加率 2.60％，1980 年は 1970年に比べて減少量 0.5 kg，減少率 0.97％，1980年は 1950年に比べて増加量 1.0 kg，増加率2.01％であった。以下同様に比較してみると19才の場合 0.2 kg減少，0.40％，1.4 kg，2.78％，0.5 kg減少，0.97％，0.7 kg，1.39％。20才の場合 0.6 kg，1.18％，1.0 kg，2.00％，0.3 kg 減少，0.59％，0.1 kg，0.20％。21才の場合 0.8 kg 減少，1.58％，0.9 kg，1.78％，0.1 kg減少，0.20％，増減なし。22才の場合 1.0 kg 減少，0.20％，1.0 kg，1.98％，0.4 kg，0.79％，0.4 kg，0.79％。

第２図　本学被服専攻学生の体位
（1985 年は生活科学専攻学生）



胸囲についてみると 1960年は1950年に比べて18才の減少量0.1 cm，減少率 0.12％，1970年は 1960年に比べて増加量 0.1 cm，増加率 0.12％，1980年は 1950年に比べて増加量 0.9 cm，増加率 1.12％。以下同様に比較してみると19才の場合 0.2 cm減少，0.25％，0.8 cm，0.99％，0.2 cm減少，0.25％，0.4 cm，0.49％，20

才の場合0.7cm，0.86％，0.9cm，1.11％，増減なし，0.2cm，0.25％，21才の場合0.4cm，0.49％，0.7cm，0.87％，0.9cm，1.10％，1.2cm，1.48％，22才の場合0.7cm，0.86％，2.0cm，2.48％，0.2cm減少，0.24％，1.1cm，1.35％。

本学被服専攻学生18才の女子の体位｛身長（2－1図），体重（2－2図），胸囲（2－3図）｝の結果は第2図に示すとおりである。（1985年は生活科学専攻学生である）

身長についてみると1981年は前年比1.4cm（増加率0.90％）伸び，同様に1982年は1.4cm（減少率0.89％）低く，1983年は前年比1.2cm（増加率0.77％）伸び，1984年は前年比0.3cm（増加率0.19％）伸び，1985年は前年比0.9cm（減少率0.57％）低くなっている。1985年は1980年に比べて0.4cm（増加率0.26％）伸びている。

体重についてみると1981年は前年比2.7kg（増加率5.26％）増加，同様に1982年は3.9kg（減少率7.23％）減り，1983年は前年比1.6kg（増加率3.19％）増加，1984年は前年比0.3kg（減少率0.58％）減少，1985年は前年比0.5kg（減少率0.97％）減少している。1985年は1980年に比べて0.4kg（減少率0.78％）減少している。

胸囲についてみると1981年は前年比1.7cm（増加率2.07％）増加，同様に1982年は前年比3.0cm（減少率0.36％）減少，1983年は前年比0.7cm（増加率0.83％）増加，1984年は前年比0cm（増減なし），1985年は1984年に比べて0cm（増減なし），1985年は1980年に比べて0.6cm（減少率0.73％）減少している。

各年度相互間における各体格の平均値の差の検定結果は次のようである。

身長についてみると危険率5％で有意差は認められなかった。

体重において危険率5％で有意差の認められたのは1980年と1981年，1981年と1982年，1981年と1983年，1981年と1984年，1981年と1985年との間に有意な差があらわれた。

胸囲において危険率5％で有意差の認められたのは1980年と1981年，1981年と1982年，1981年と1983年，1981年と1985年，1982年と1984年との間に有意な差が認められた。

本学学生の体位を概観するために，昭和58年度総理府統計局の日本統計年鑑による全国成績と本学の成績とを比較すると次のようである。

第7表　昭和56年度と昭和36年度の体格の比較
（全国女子）

区分		身長（cm）			体重（kg）			胸囲（cm）		
		昭和56年度	昭和37年度	差	昭和56年度	昭和36年度	差	昭和56年度	昭和36年度	差
中学校	12歳	150.5	144.3	6.2	42.4	37.3	5.1	74.2	70.4	3.8
	13歳	154.2	148.8	5.4	46.6	41.9	4.7	77.2	74.0	3.2
	14歳	156.0	151.1	4.9	49.5	45.3	4.2	79.4	76.8	2.6
高等学校	15歳	156.6	153.0	3.6	51.6	48.1	3.5	80.9	78.9	2.0
	16歳	156.9	153.5	3.4	52.2	49.8	2.4	81.5	80.3	1.2
	17歳	157.1	154.0	3.1	52.3	50.6	1.7	81.7	81.0	0.7

本学の1980年～1985年の平均身長値は157.2cm，平均体重値51.7kg，平均胸囲値82.2cmであった。（18才の場合）

1980年の18才女子の身長の全国平均値は157.0cm，本学被服専攻学生の平均値は156.4cmで全国平均より0.6cm劣っている。同様に1981年についてみると全国平均値は157.4cm，本学の場合は157.8cmで全国平均を0.4cm上まわって僅かに優れていることがわかった。

体重についてみると1980年の全国平均は50.8kg，本学の場合は51.2kgで全国平均を0.4kg上まわって僅かに優れていることがわかった。同様に1981年についてみると全国平均は51.2kg，本学の平均は54.0kgで全国平均を2.8kgも上まわり成長が著しい。

胸囲についてみると1980年は全国平均81.3cm，本学学生は82.2cmで0.9cm上まわっていて優れていることがわかった。同様に1981年の全国平均は81.4cm，本学は83.9cmで2.5cm上まわって優れている。

最近の女子の体格の向上は著しい。これは栄養摂取の向上，精神的な解放感，居住様式の変化により身長，体重，胸囲が増加したもののようである。

中学校，高等学校生徒（全国女子）の体格について昭和56年度と20年前の昭和36年度を比較してみると第7表のとおりである。

まず昭和56年度は昭和36年度に比べ，いずれの年齢においても計測値について向上しているが，特に身長，体重の向上は著しい。

身長については昭和56年度の13才（154.2cm）は昭和36年度の17才（154.0cm）とほぼ同じである。

体重については昭和56年度の15才（51.6kg）は昭和36年度の17才（50.6kg）を上回っている。

4. 総　括

1983年７月～８月にわたって，本学被服専攻学生の家庭の主婦およびその近隣の家庭の主婦について和服製作寸法調査の結果，次のようなことが明らかとなった。

①袖丈，袖口，袖幅，袖附，袂の丸み，身入っ口，とも標準寸法とのかかわり合いが大きい傾向がみられた。

②身丈は標準寸法を用いている者が大部分であった。身長の高い者が標準寸法にとらわれている傾向が大きかった。身長の低い者が必要以上に長い身丈を着用している傾向がうかがえた。

③ゆき丈については，着装による融通がきかないのに長身者でも体格が考慮されていない。

④後幅，前幅，合褄幅のいずれにも標準寸法が用いられ体格との関係が考慮されていない。

⑤衿下丈についても着装上の問題，身長との関係など配慮されていない。また標準寸法にとらわれている傾向が大きい。

和服はゆるやかな形のものであるが，身長の増加は着丈，身丈，衿下，袖丈の増加となる。また洋服着用の習慣は腰紐の位置を従来より高くするような着装になり，おはしよりに影響し，身丈，衿下を長くするようになった。体格の大型化は身幅，ゆきにも関係する。和服は着装に焦点があり，着装は個人の好みが強いから同じ体格でも個々に差異があることはいうまでもない。着装に価値をもつ和服は動作の表現とともに優雅，低俗，若向き，老人向きなど融通のきく着装のおもしろさがある。

最近は日本人の体格が向上し，従来の標準寸法に対する意識に一考を要する必要がある。また和服着装上の美観，着やすさの点からも体格に合った和服の構成には合理的な寸法を得ることが大切な要素である。便利な標準寸法を利用するのもよいが，更に進んでよくその着用者と着用の目的を熟知して割り出し法によって合理的にこれを考え，吟味して正しい寸法を得るようにしなければならない。

和服寸法は着装によって体型に合わせる和服の特長を生かし，その求め方も簡単であることが望まれるが，現代の体格，着装姿に適する寸法の求め方を見出していくことが必要ではないかと考えられる。

終りに本調査にご協力下さいました学生諸氏および面倒な記入をおひきうけ下さいました主婦の方々に深く感謝の意を表します。

参　考　文　献

1) 文部省：学校保健統計調査報告書，大蔵省印刷局（1983）
2) 総理府統計局：日本統計年鑑，日本統計協会(1981)
3) 柳沢澄子他４名：被服構成学，光生館（1971）
4) 水梨サワ子：被服構成学，朝倉書店（1968）
5) 土井幸代：和裁，同文書院（1971）

（昭和60年10月28日受理）